中尾　あゆみ

RING ART 2011 Report

武藤　真也

調枝　尚興

吉村　昇剛

春風ながさきより

平和展・８＋９

2011　XIII

2011

古賀　康生

那須　結生

大串　琴美

堀　僚太郎

丸山　紘平

山脇　広大

平野　勇希

山口　亮

藤田　孝

池田　将貴

表紙表裏作品：長崎大学教育学部附属特別支援学校高等部生徒・他

はじめに

２０１０年、長大井川研究室ＯＢ会は新たにRING ARTとその名称を変更して再始動しました。再スタートした翌年に当たる２０１１年は、私たちの活動の今後を占う意味でも、少しでもいい展覧会を作ろうという意気込みがメンバー全員にありました。RING ART主催による初の「春風ながさきよりⅩⅢ」でしたが、開催直前に起きた大震災によって、海外からの渡航も難しい状況となり、半ば諦めの気分と、正直このような大変な状況の中で果たして開催してよいのかという気持ちさえ持ち始めていました。しかし、海外からは渡航自粛ムードが広がっている状況にもかかわらず招待の３名の先生方は長崎に駆けつけてくださいました。

アートを通じた人と人との交流は、私たちの活動の原点にあります。どこの国、どこの地域、隣人でさえも表現の仕方は人それぞれ違います。文化や言語の違いも超え、お互いの表現を認め合いながら人との関係を築いていくことこそ、アートを通じた私たちの目指す「平和」の在り方といえます。この「春風ながさきよりⅩⅢ」では、参加者全員が震災や原発事故に対する思いを胸に、この展覧会に参加してくださったと思います。それぞれの思いをアートによる表現を通じて、ひとつの空間を共有し、これまでなかった新たな「場」を生みだすことができました。また、被爆地長崎からアートを通じて平和をアピールするために長年取り組んできた「平和展・８＋９」では、参加者の枠を広げ、一般の市民の方や地元の作家にも参加していただくことができました。特に印象に残ったのは、表現を通じて障害のある人もない人もみんな同じ空間、場を共有することができたことです。その表現のもつ力には、年齢や性別、障害の有無など分けるような壁はありませんでした。

本誌は、昨年行ったふたつの展覧会を記録した内容です。長年にわたり「現代美術」を通じて、地域とのつながり、国際交流、平和活動、子ども教育など、長崎を起点として取組んできた実績の積み重ねの上に実現したのが、この「春風ながさきよりⅩⅢ」と「平和展・８＋９」です。本誌を通じて、私たちの取り組みを広く一般の方にも理解を深めていただき、より一層この輪を広げていきたいという願いを込めて本誌を作成しました。一地方における私たちの活動はほんのささやかなものですが、ここ長崎であるからこそできる取り組みに、私たちは価値を求めています。

この地を中心に平和の輪が広がるように、私たちの活動も確かな広がりを見せ始めています。今年、長崎大学と長年交流を続けてきた韓国慶北大学校から「春風ながさきより」を大学美術館で開催したいという思いがけない依頼がありました。私たちのこれまでの取り組みが高く評価されたことと受け止めています。

最後になりましたが、大震災後いち早く現地に駆けつけた大学として、震災支援活動に尽力される長崎大学長、片峰　茂先生には、大変ご多忙の中、私たちのアート活動へのご支援をいただき心から感謝申し上げます。そして、これまで温かいご支援と惜しみないご協力によって活動を支えていただいた国内外のＯＢ諸氏、長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室、新田照夫先生に心から感謝の意を表したいと思います。

２０１２年３月
RING ART代表　野坂　知布

開催概要
春風ながさきよりⅩⅢ

期　間：２０１１年３月２５日（金）～３月３０日（水）
場　所：長崎ブリックホール・ギャラリー
　　オープニング セレモニー：３月２５日（金）
　　ギャラリートーク：３月２６日（土）
主　催：RING ART実行委員会
後　援：長崎大学

これまで国内外に主として韓国や中国作家を長崎にお招きして、美術による文化発信をし続けてきた本展は13回目を迎えました。

２０１０年、日本とポルトガルは友好１５０周年を迎え、ポルトガルのアーティストを長崎に迎え、併せてこれまで交流してきた韓国、中国とのアーティストも招待することになりました。

長崎における出島時代に、その出島に最初に居留したのは、ポルトガル人でした。このポルトガルとの交流を、今回、特に大航海時代を築き挙げられたポルト港で、現在活躍されているアーティストを平成の時代に迎えることができました。

実は、長崎市とポルト市は姉妹都市でもありながらも、アーティストたちの交流は、これまであまり例を見ることがなく、現在に至っているようです。学術的には２０１０年晩秋、長崎大学とポルト大学が国際学術交流協定の提携の運びとなりました。これを契機に大学と市民との合同的な美術の交流を促進していこうと、本展を企画することになりました。

今回は先述の通り、ポルトガルのアーティストであり、また美術教育者でもあるポルト大学芸術学部長のラランジョ教授が来崎され、それに加えて、これまで長年交流して来た韓国の慶北大学校の朴南姫教授（専門：西洋画）、昌原大学校の姜パレム教授（専門：韓国画）、そして中国中南民族大学の鐘孺乾教授（専門：中国画）の計４人の作品を中心に、RING ARTのメンバーたちの作品との共演となりました。

特別な美術展

２０１１年春、恒例の美術展「春風ながさきⅩⅢ」が開催されました。しかし、今年は、例年とは異なる特別のものとなりました。直前に、東日本大震災という思いもかけない大災厄がこの国を襲ったからです。韓国やポルトガルなど海外から参加された先生方をふくめて、全ての作家たちの犠牲者への鎮魂と被災者への励ましの思いが、美術展全体を覆い尽くしているように感じました。

今回の大震災は、被災地からは離れた長崎に住む私たちにとって他人事ではありませんでした。ＴＶから流れる地震直後の大津波で跡形もなく破壊されつくした町々の光景を映した映像は、私たちの胸に刻まれた66年前の長崎の悲しい記憶、原子野の光景と重なるものでした。そして、東京電力福島第一原子力発電所の重篤な事故が追い打ちをかけました。

皆が、何かをしなければという思いを強く抱きました。それが、長崎大学をあげた迅速な支援活動につながったのです。とりわけ、第３の被ばく地となってしまった福島県には、使命感に燃えた多くの教職員が足を運び、放射線汚染地域での支援活動に従事しました。

そして８月、原爆記念日にあわせて「平和展・８＋９・２０１１」が開催されました。長崎が核兵器廃絶と平和への願いに包まれるこの季節、それぞれの思いを携えて再び作家たちが集結しました。原爆犠牲者への祈りと、引き続く困難の最中の大震災被災地への思いが、同調して響きあっていました。

私は、芸術（アート）の力を信じたいと思います。芸術表現には、未曽有の悲しみや試練の最中にあって、それを直視し、寄り添い、それを昇華し、未来への希望の光を灯す、それだけの力があるのだと思います。

国立大学法人　長崎大学長　片峰　茂

フランシスコ・ラランジョ 教授
（ポルト大学芸術学部長）

「春風ながさきよりXⅢ」ギャラリートーク
長崎ブリックホール・ギャラリー 2011.3.26

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を知った際、友人らのことが心配になると同時に、正直に申しますと、日本に行くのは危険だと思いました。また、ポルトガル外務省も日本への渡航を自粛するようにとの声明を出しましたので、誰もが私の長崎行きに反対しました。

しかし私は、２０１０年11月のポルト大学での個展を受け入れて以来親しくしている長崎大学名誉教授の井川惺亮先生から、『春風ながさきよりXⅢ』に出向いて出展するよう招待を受けていました。

長崎の状況も分からず、開会すら危ぶまれるのではと思っていた折の井川先生からの電話で、展覧会の実施、長崎の安全性、さらに長崎の皆さんが私を待っていることを知りました。皆さんが私を待っている…！ポルトガルの友人らの反対を押し切り、私は日本へ行くことを決意しました。そしてその時には、今回の長崎への旅がこんなにも実り豊かなものになるなど、知る由もありませんでした。私に渡航を決意させた、井川先生の熱意と友情に心から感謝いたします。

日本はいつも、私にとっての憧れの地でした。物心が付いたときには、日本への旅を夢見ていたほどです。

「長崎」という地名は、私にとって魔法の言葉のようなものです。ポルトガル人が居住していた場所だということは私も学校で勉強しましたし、かの有名な『蝶々夫人』の舞台になった場所でもあり、さらには私の住むポルト市との姉妹都市なのですから。

長崎は、コントラストに満ちた素晴らしい街だということにすぐに気付きました。海と山、伝統と現代性、文化と文明。一例を挙げると、息をのむほど美しい県立美術館と、手入れの行き届いた古い寺院のコントラストは、私の目を大いに楽しませてくれました。

また、形式を重んじること、丁寧で真心のこもった姿勢、ホスピタリティーに満ちた対応も随所に見られました。

今回出展した作品は、50×70 センチの5つの作品のシリーズもので、全て墨で描いています。今回の招待を受けて制作したものですが、みなさんがどのような反応をされるのかと不安な気持ちもありました。学生の頃味わった、テスト前の緊張感のようでした。

絵を描くのに、順序というものはありません。とても原始的な手法である、ただ単に線を描くことですら、作り手の価値観と意図を付与することができるのです。芸術は世界共通の言語です。

また、作品にストーリー性を持たせずに、偶発的に描くことも良いでしょう。芸術に理解のある人は、それにも価値を見出します。

最後に、大韓民国慶北大学校の朴南姫先生と大韓民国昌原大学校の姜パレム先生、イニシアティブをとられたRING ARTの皆様、長崎のアーティストの皆様、声が枯れるまで通訳を務め上げてくれた井川瑠実さん、そして長崎の親友である井川惺亮先生に、心から感謝申し上げます。

フランシスコ・ラランジョ

（翻訳：井川瑠実）

1 朴 南姫教授（春風展）
2 フランシスコ・ラランジョ教授（春風展）
3 鐘 孺乾教授（春風展）
4 山本 伸樹（８＋９展）
5 姜 パレム教授（８＋９展）
6 姜 パレム教授（春風展）

春風ながさきよりXⅢ展の意味と韓日交流

慶北大学校芸術大学美術学科教授　朴　南姫

韓国の慶北大学校芸術大学と長崎大学教育学部は、１９８８年２月、慶北大学校で長崎大学の井川惺亮先生、柴野勝一先生、田崎英昭先生、卒業生、在学生をお招きし、初交流を開始した。続いてその年７月に長崎大学にて慶北大学校美術学科教授と学生が招かれ、長崎新聞社での教授作品展、長崎大学展示場での学生作品展、学術セミナーが開催され、両大学間交流協定が結ばれることとなり、以後定期的にコンスタンスに持続して交流することとなった。

「10年経てば江山も変わる」という韓国の諺があるが、長崎大学と慶北大学校は20年以上も交流の歴史を積み上げ、おそらく韓国と日本の大学の歴史上、稀なことである。１９８６年７月、東京の神田におられた作故の山岸先生、彼は当時は無名の李禹煥先生を招待したこともあり、日韓交流に積極的な方で、彼の画廊で「朴南姫個展」の招待展を開催したが、その場が井川先生との初出会いとなった。その出会いが後日両大学を結ぶ種となり、長崎大学と慶北大学校の交流が始まった。

山岸先生は韓国現代美術に対する高い関心を持ち、韓国作家との交感を重視したし、井川先生もやはり芸術家的熱情、教育者的使命感から韓国現代美術について実に至大な関心を持ち、いつもこちら慶北大学校側を感動させた。

筆者と井川先生はフランス語を通して両大学の交流の濃度を深めることができた。両大学の交流は、音楽学科へ広がり熱性的に進行したが、音楽学科との交流を積極的に進めた小手川晶子先生が数年前作故したが、今でも両大学の音楽学科の交流が持続している。

時が流れ、両大学の交流の中心である井川先生が長崎大学を定年退職されたが、芸術家的熱情、教育者的使命感は「春風ながさきより」の名に変わり、長崎の現代美術家のリーダー的存在として現代美術発展のため努力されておられる。井川先生の芸術的リーダーシップとエネルギーや、後輩の現代美術家をリードして行く姿には自然と頭が下がる。

２０１１年３月25日から30日まで「春風ながさきよりXⅢ展」が企画され、私とポルトガル・ポルト大学のフランシスコ・ラランジョ教授、昌原大学校の姜パレム教授が招聘された。その時、日本は津波と原発事故とで国内外的に非常に大変な状況であったが、それを乗り越え長崎の現代美術を国際的に成長させようとする井川先生の教育家的使命感から深い感動を受けた。当時、筆者は慶北大学校の平生教育院（生涯学習センター）の院長をしており、そこは学部より開講が遅く、開講直後で海外出張が難しい時期であったが、「春風ながさきより」に対する井川先生の熱情と日本の危機状況を知っていたため、時代的な困難を、芸術を通して昇華する良いきっかけになると判断し招聘に応じた。招聘して下さった井川先生に心から感謝している。国内外的な困難の中にも関わらず、揺るぎない落ち着いた姿勢で全ての行事を進行していた長崎の作家たちからも勇気とエネルギーを発見した。

「春風ながさきより」は、これから長崎を越え国際的に跳躍する礎石を十分に固めているので、大邱からも温かい目線で見守っている。日本が最初に門戸開放した長崎が日本の現代美術の新しい求心点となり、国際舞台でも活発な活動と跳躍することを期待する。２０１１年「春風ながさきより」への感謝と激励のメッセージを通じて、筆者が長崎に滞在する間、お世話になった井川先生および関係者の方々に心から感謝したい。

２０１２年１月15日　韓国の大邱から

（翻訳：申　京愛）

朴　南姫教授　ギャラリートーク　長崎ブリックホール　2011.3.26

２０１１年、日本での展覧会に寄せて

昌原大学芸術大学美術学科教授　姜　パレム

２０１１年、私は招待を受け、日本で二つの展覧会に参加しました。

ひとつは３月の末に行われた「春風ながさきよりXⅢ」です。この展覧会が開催される少し前、日本は考えられないほどの大震災に見舞われ、大きな衝撃と悲しみを受けました。

日本が混乱状態だった当時、私は足の手術を終えたばかりで医者からは安静にと言われており、身体的な面でも日本に行くことができるのかという不安がありましたが、私は来日を決意しました。

決意した理由のひとつは、日本が大変な今こそ、直接足を運び展覧会に参加することで私の気持ちを伝えることができるのではないか、と思ったこと。私が知っている日本の方々はどんなに大きな問題に直面しても、それを上回る努力によってまた元の良い状態に帰る道をわかっていると信じているので、オープニングセレモニーではそのことをお伝えしました。また、井川先生との長年の信頼と友情は深く大きなものなので、日本が不安な状態だから、足が痛いからといって簡単に壊れるものではありません。

そのようにして参加したこの展覧会では、ポルトガルからお越しのラランジョ教授との新しい出会いによって未来に向けた更なる国際交流の可能性を見出すことができ、何より、多くのアーティストの皆さんと一緒に作品を展示することで日本を応援するメッセージを発信できたことに大きな意味があったと思います。

そして８月には平和展である「８＋９　２０１１」に参加しました。３月に引き続き、日本を応援する意味も込め来日したこの展覧会で興味深かったのは、特別支援学校の生徒さんたちも参加していた点です。その素敵で力強い作品を見ながら、幅広い平和の意味を考えることができました。さらに、催しの中で小浜でのワークショップに参加し、あいにくの雨でしたが日本の未来を支える子供たちが楽しく美術に取り組んでいる姿を見ることができとても嬉しく思いました。

ギャラリートークでは作品を前に、私の考える平和、戦争について作品と関連させながら述べ、市民の皆さんと意見を交換することができました。他の芸術家や哲学者の皆さんの平和に関する発表も聞くことができ、とても有意義な時間を過ごすことができたと思います。

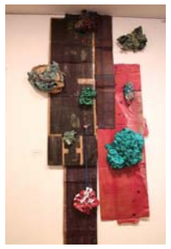
このような機会に恵まれたことに感謝し、今後ともこの交流が末永く発展していくことを祈願します。

姜　パレム教授　ギャラリートーク　2011.3.26

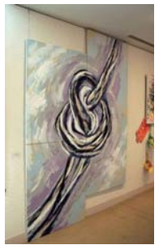
「春風ながさきよりXⅢ」オープニングセレモニー
２０１１年３月25日　長崎ブリックホール

手前より
朴　南姫教授
片峰　茂　長崎大学長
フランシスコ・ラランジョ教授
宮脇　雅俊氏（長崎日本ポルトガル協会会長・十八銀行頭取）
姜　パレム教授
村里　榮氏（長崎市美術振興会理事長）

春風ながさきより XIII 2011


4

3


2

1

8

7

6

5

13

12

11

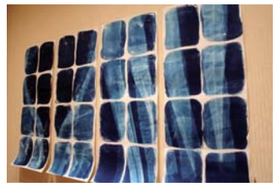
10

9

17

16

15


14

22

21

20

19

18

重野　裕美（長崎）
松尾　美希（長崎）
鹿山　悦子（神奈川）
野坂　知布（長崎）
増田　和剛（高知）
森永　昌樹（佐賀）
廣岩　裕香（長崎）
守屋　聡（長崎）
岩永　晃典（長崎）
田熊　沙織（福岡）
村里　政則（長崎）
佐藤　千代子（長崎）
中田　寛昭（福岡）
申　京愛（大邱）
川田　剛（大邱）
洪　東植（釜山）
李　男美（大邱）
盧　淳天（昌原）
金　昭榮（大邱）
朱　淵雅（昌原）
尹　智珉（昌原）
南　孝眞（昌原）

27

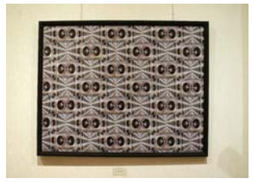
26

25

24

23

32


31

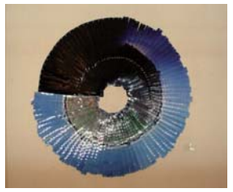
30

29

28

37

36


35

34

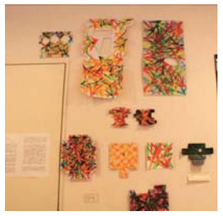
33

41

40

39

38


43

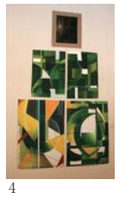
42

烏　鳴鳴（内蒙古）
烏　鳴蕾（内蒙古）
小栗栖まり子（ソウル）
井ノ上理恵（昌原）
藤上　慶（昌原）
金　福洙（清州）
米村　昭彦（長崎）
村里　榮（長崎）
金子　衛（長崎）
萬屋　弘子（長崎）
内藤　修子（長崎）
下田富美子（長崎）
吉岡　宣孝（長崎）
降田　達季（長崎）
山下　良夫（長崎）
岡元　和正（長崎）

フランシスコ・ラランジョ　教授（ポルト大学）
朴　南姫　教授（慶北大学校）
姜　パレム　教授（昌原大学校）
鐘　孺乾　教授（中国中南民族大学）
井川　惺亮　名誉教授（長崎大学）

平和展・8＋9　2011

5


4

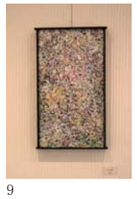
3

2

1

11

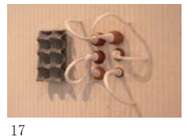
10


9

8

7

6


17

16

15

14

13

12

23

22

21

20

19

18

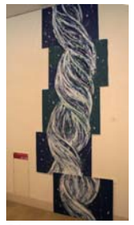
29

28

27

26

25


24

山本　伸樹（福島）　1
崔　民建（清州）　2
江崎　秀之（東京）　3
藤上　慶（昌原）　4
藤田　孝（長崎）　5
降田　達季（長崎）　6
廣岩　裕香（長崎）　7
洪　東植（釜山）　8
堀　僚太郎（長崎）　9
井ノ上　理恵（昌原）　10
入江　一樹（長崎）　11
岩永　晃典（長崎）　12
朱　淵雅（昌原）　13
姜　善英（東京）　14
金子　衛（長崎）　15
康　元澤（昌原）　16
川田　剛（大邱）　17
川田　泰子（鹿児島）　18
金　昭榮（大邱）　19
金　福洙（清州）　20
李　男美（大邱）　21
林　銀洙（清州）　22
増田　和剛（高知）　23
松尾　美希（長崎）　24
宮崎　正太郎（福岡）　25
森永　昌樹（佐賀）　26
守屋　聡（長崎）　27
村里　政則（長崎）　28
永田　則子（東京）　29

35

34

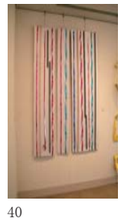
33

32

31

30

41


40

39

38

37

36

46

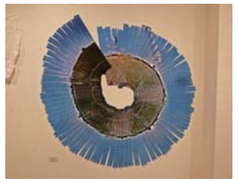
45

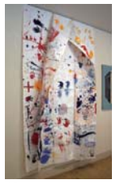
44

43

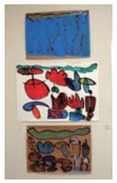
42

51

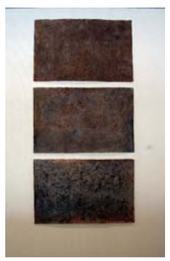

50


49

48


47

54


53

52

内藤　修子（長崎）　30
中田　寛昭（福岡）　31
盧　淳天（昌原）　32
野口　美砂子（長崎）　33
野坂　知布（長崎）　34
小栗栖まり子（ソウル）　35
朴　然娥（大邱）　36
朴　眞皿（清州）　37
佐藤　千代子（長崎）　38
重野　裕美（長崎）　39
下田　富美子（長崎）　40
申　京愛（大邱）　41
田熊　沙織（福岡）　42
浦川　亜津子（清州）　43
薄井　崇友（東京）　44
烏　鳴鳴（内蒙古）　45
烏　鳴蕾（内蒙古）　46
山口　亮（長崎）　47
山村　みき（福岡）　48
山村　知宏（福岡）　49
吉岡　宣孝（長崎）　50
尹　智珉（昌原）　51

長崎大学教育学部
附属特別支援学校　高等部生徒　52
姜　パレム　教授　（昌原大学校）　53
井川　惺亮　名誉教授（長崎大学）　54

開催概要
「平和展・８＋９　２０１１」

会　　期：２０１１年８月17日（水）～21日（日）
会　　場：長崎ブリックホール２Ｆギャラリー
関連行事：折り鶴パフォーマンス　８月９日（火）
　　長崎市原爆落下中心地公園「誓いの火」灯火台モニュメントにて
　　小浜ワークショップ　　８月20日（土）
　　ギャラリートーク　　８月21日（日）
主　　催：長崎大学 産学官連携戦略本部 生涯教育室・RING ART実行委員会

「平和展・８＋９　２０１１」は、これまで長崎大学井川研究室で開催されてきたものを、より一般市民にも参加を呼び掛けるものとして、今年も国際的な平和展を目指して開催しました。

井川惺亮氏（長崎大学名誉教授）のご退官を機に、同研究室OBたちが中心に組織したRING ART実行員会が運営を行ってきましたが、井川氏が長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室の客員教授になられたのを機に、事務局をそちらに移管しました。

折しも東日本大震災後、被災地の復興や福島原発の事故といった大きな課題を抱えた現状において、アートを通じて社会に貢献する使命を感じ、この長崎から平和や命の尊さアピールしていきたいと願いました。

私たちの活動は現代美術を基調としています。一般には難しい印象を持たれがちですが、私たちの目指すところは、誰にでも親しみやすく地域に寄り添った美術、そして地元長崎ならではの取り組みです。井川研究室を巣立った日本、中国、韓国の若者は、それぞれの国や地域に戻り、この長崎の地で学んだ平和に対する考え方をベースにしながら、それぞれの美の感性を発展させています。本展の意義は、そうした平和へのそれぞれの想いを、アートに託して広めていくことであると思います。

開催期間の関連行事では、８月20日（土）にはワークショップを小浜の子どもらと実演し、最終日、８月21日（日）には出品者によるギャラリートークを行いました。ここでは、本展の目玉企画として、長崎大学客員教授、高橋眞司先生の「平和」をテーマとした講話、「誓いの火」灯火台モニュメント設立の関係者、池田真樹氏によるスピーチ、また長崎大学協定校の韓国昌原大学校姜パレム教授をご招待し、アートによる国際的な平和の在り方を考える機会となりました。

１９８７年８月９日、井川惺亮氏によって長崎市爆心地公園に「誓いの火」灯火台モニュメントが建立されました。この長崎を最後の被爆地にしようという強い願いを込め、２００２年から平和の日にこの灯火台モニュメントの下で、平和を希求しながら、折り鶴を折り、モニュメントに貼り付ける『折り鶴パフォーマンス』を行ってきました。この年も８月９日(火)には原爆落下中心地公園の灯火台において、『折り鶴パフォーマンス』を実施しました。

長崎市原爆落下中心地公園 「誓いの火」灯火台モニュメントにおける「折り鶴パフォーマンス」の様子

「いわき2011」 山本　伸樹（2011）

特別出品
山本伸樹（福島在住作家）

今度の大震災それに依る大津波、そして原発事故がとどめを刺した。
まさか私が住むいわきというこの地で、こんな大惨事に遭遇するとは夢にも思わなかった。
未だに夢見心地と言ってもいいかもしれない。

たまたま個展を目前にして準備を進める中、急遽、大震災の現状と、原発事故とそれに関する東電や関係省庁の対応に対する、怒りをアピールする事にした。

震災後のいわき市の様子を、美術という表現活動に携わる者として、自分の日常の中でそれをしっかりと受け止めなければとの思いと、そんな気持ちとは裏腹な抑えきれない衝動にもかき立てられながら、時間があれば、自分の被災の状況は無論、津波の被害に遭った地域の悲惨な状況を取材して回った。

その時の記録写真と、実物大の軽トラックを原型とした張り子の軽トラックや同じくドラム缶、柱等を、津波後の風景の実物大のオマージュとして組み合わせて、インスタレーションを制作し、津波の悲惨さを表現した。

また原発を巡るメディアの内容を多数引用して、それに私が最近メタファーとしてよく使う、新聞記事で被われた、子豚の張りボテの人形５０個とを組み合わせて、原発の恐ろしさ、原発への怒りを鑑賞者と共有できるようなインスタレーションにした。

現在、津波や原発事故からの避難者の方々との、コミュニケーションや復興の為の提案をテーマとしたアートプロジェクト「分かち合い」を企画し、〈福興し達磨〉生産の提案や、〈らくがき隊〉での子供達の落書き会、〈どこでもアート〉の作品写真をプリントした特殊シールの配布などを東松島や陸前高田を訪れ仮設住宅の人々等に実施してきた。

大地震と津波に依る被害は甚大ではあったが、その悲惨さから、人々は着実に復興しつつある。
しかしながら、原発事故という有ってはならない事故によって、見えない恐怖と不安を抱え、我々はどうする事もできないでいる。

「誓いの火」灯火台モニュメント設立委員会　池田真樹氏によるスピーチ

長崎大学客員教授　高橋眞司氏による「平和」をテーマとした講話
「平和展・8＋9　2011」ギャラリートークにて　2011.8.21

「平和展8＋9・2011」
―東日本大震災後の平和展

長崎大学客員教授　高橋　眞司

「平和展8＋9」は、井川惺亮と井川研究室に所属する学生、卒業生、そして内外のアーティストたちが内なる平和への思いを素材に託して相つどう被爆地ナガサキの年中行事として定着してきた。

今年も海外から招聘作家、友情出品があり、一見してすぐにその制作者が思いうかぶ個性的な作品があまた寄せられた。そうしたなかで、故国・内モンゴルに帰郷して、ふるさとのなつかしい草原や木立や馬を描いて技術的にも精神的にもいちじるしい進境を示した烏鳴鳴氏や、韓国に留学して新たに伝統文化の古典的様式美にめざめつつある小栗栖まり子氏の作品などが眼にとまった。

２０１１年（平成23年）は、プレート境界型の大地震、未曾有の巨大津波、そして福島原発の過酷事故が発生して、日本のみならず世界中の人びとを震撼させた特別の年となった。夏の「平和展」には福島から山本伸樹氏の特別参加があった。日ごろ見なれた景色が突如として瓦礫と化した現実をリアルに写し撮った11枚の写真を、氏は「十字架」をかたどって配置した。それによって山本氏は今年の「平和展」に明確な方向づけを与えたのであった。

そうした方向性のなかで全体を眺めてみると、林銀洙氏（韓国、清州）の海中（わたなか）の青のイメージに惹きつけられた。うすい青のコンテで描かれたおもかげは津波によって「流された」大切なひとが太平洋の水底から水面（みなも）に浮かびあがってきたかのようであった。まるでアスカの地上絵のようにあわく描かれた亡き人の面影は瞑目するのでなく、かえって大きく眼を見開いて私たちを静かに見守っているようにも見える。林銀洙氏の作品は小品ではあるが、意味するところはそのようにしみじみとして深いものがあった。

和紙を鉄さびで着彩する特殊な技法を開発した姜パレム教授（招聘作家、韓国、昌原大学）は、微妙に濃淡の異なる三枚の和紙を上下に展示した。３・11以前に制作されていたにもかかわらず、作品の前に立って私たちが想起したのは、津波が火災をひき起こし、港と市街地を炎上させた春の東日本大震災の生々しい廃墟のイメージであった。ブリックホール２階の円形ギャラリーで、それは井ノ上理恵氏（姜教授のもとで研鑽中）の、和紙とはおもわれないやわらかな質感の、綿のような繭のような「純白のあるもの」とたがいに遠く離れていながら響きあうのであった。おなじ素材（和紙）でありながらおよそ対蹠的なこれらふたつの作品は、「グリーンピース」の活動家が「息をのむほど美しい」と表現したフクシマの３・11以前と以後の現実の様相を象徴したものということができる。

作家が「自作を語る」セッションでは、山村知宏氏（井川研究室OB）の作品が注目をあつめた。山村氏は水郷・柳川の実家にもどって、縦横ともおとなの背丈を優にこえる大きな画用紙を庭に広げて、そこに自身と親戚の子ども近所の子どもを呼び入れて、無邪気ににぎやかにたくさんの手形をつけた。「おとなと子どもの手形の協奏」と呼んでいいこの作品について、制作者のことばをきいているとふるさとのおだやかな陽射しや村人たちとの交歓、さざめきも伝わってくるようであった。ふだんの年であれば当たり前のこととして見過ごしてしまうかもしれぬ、幼い子どもたちとともに過ごす時間（共に在る、慈しむ、協働する）こそこの世の中で何ものにもかえがたい貴重なものである、という３・11以後の新しい感性の目覚めを山村氏の作品は表現していたのである。

さいごに特記すべき点は、野坂知布教諭（井川研究室OB）の指導によって長崎大学附属特別支援学校（高等部）の生徒たちの切り絵作品が展示されたことである。作品は井川惺亮の切り絵の手法に工夫をこらしたものであったが、それぞれに困難をもちながらも、邪念のない若い魂のひたむきなフォルム（造形）への打ち込みは見るものの心を明日に向かって奮い立たせるものであった。

「平和展・8＋9　2011」関連企画

「小浜ワークショップ」

日　時：２０１１年８月20日(土)
場　所：小浜温泉公園
内　容：①「うちわに色をぬろう！」
　　②「シャボン玉で絵を描こう！」
指導者：井川　惺亮　長崎大学名誉教授
　　姜　パレム　昌原大学校教授
主　催：長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室
共　催：「小浜ば花いっぱいにすうで」事務局

「小浜ワークショップ」は古くから温泉街として栄えた小浜町（雲仙市）で地域の活性化を図る取り組みとして始まりました。地元の有志で結成された「小浜ば花いっぱいにすうで」（代表：城谷雅司氏）から1995年、長崎大学井川惺亮のもとに「美術によって小浜を活気づけて欲しい」と依頼があり、以降毎年活動を続けています。

現在では、地元の小学生を対象としたワークショップへと発展し、井川研究室の国際展とも連動させながら、地域の子ども教育と国際交流の機会として取り組んでいます。

昨年は、「平和展・8＋9　2011」の関連企画として、指導者に井川惺亮先生と昌原大学校教授の姜パレム先生を迎え、「うちわに色をぬろう！」「シャボン玉で絵を描こう！」という２本立てのワークショップを行いました。

「小浜ば花いっぱいにすうで」代表の城谷氏は、この取り組みについて次のように語っています。

「この時期になると、井川先生のワークショップがあるだろうと楽しみにしている人や協力してくれる人が非常に多いです。子どもたちは大人が考えつかない発想の面白さがありますね。何より私たちの創造を遥かに超えて喜んでくれています。どんな授業よりもすごく楽しみがあるようです。そういうものに寄与できることは、私たちの生きがいであり、喜びです。これからも継続していきたいと思っています。(※)」

(※)RING　ART実行委員会（２００９年）：「地に根をはった美術　RING　ART」過疎化に向かう温泉街の子どもアート　小浜ワークショップ１９９５年～城谷雅司氏インタヴューより

2011年8＋9展

松尾美希

今回も「8＋9展」に参加できたことを感謝しています。

搬入と折り鶴のパフォーマンスには参加できませんでしたが、灯火台の清掃や小浜のワークショップ、ギャラリートークには参加できてよかったと思います。考えてみると「8＋9展」は作品展示以外にもイベントが盛りだくさんでした。

ブリックホールギャラリーの雰囲気はとても明るく輝いているように感じました。

特別支援学校の生徒さんたちの作品も、先生がたの作品もランダムに配置されていて名前だけしか書かれていないので、本当に対等な関係に思えました。

東京のトキ・アートスペースで、井川先生と同じ空間でグループ展をすることの価値を改めて感じていたところだったので、今まで学生とも対等にグループ展をされてきた井川先生らしい、今回の展示だったと思います。

ギャラリートークで初めて特別支援学校の生徒の作品だと分かったものもあり、彼らの感性と力強さ、また作品を作ることへの思いに、圧倒された気がします。

小浜のワークショップでは雨の心配もありましたが何とか持ちこたえ、子供たちとうちわ作りとシャボン玉で絵を描くという経験ができました。小浜の子供たちが生き生きとして、すぐに打ち解けて話しだして、ワークショップを楽しんでるのも印象的でした。

京都からいらしたという姜先生の知人、尺八奏者の桜井さんが小浜の公園の隣に泊まっていらしたのも、朝からポツリとした雨が、通常ならすぐに大雨になりそうなところを昼食直前になるまで降り出さなかったのも、偶然というより奇跡に近いものを感じました。16年も続いているという城谷さんを始めとする小浜のメンバーたちの活動、また井川先生との縁をここでも感じました。

縁といえば、長大の産学官連携戦略本部生涯教育室主催になったこともそうですし、新田先生、高橋先生には本当に感謝しています。

姜先生や井上さん、東京や福島からの参加者にも。韓国、中国からの参加者、そしてすべての参加者にも。

参加者一人一人の縁によってできているRING ARTの力はまだまだ大きく広がると思います。

ギャラリートークの廣岩さんの言葉で「祈ることって、何もならないってことはない。何かになっている。祈った自分自身に変化が起きているのだから。」という言葉が印象に残っています。

震災津波の後、世界中が日本のために「祈り」をささげたと聞いています。

世界中が一つになったとき、自身の損得に関係なく、他者のために一つの思いになったとき、必ずよい方向へ向かうはずだと信じています。

その目に見えない大きな力を信じて、目に見えるアートを製作していくことが私たちにできることであり、今後のRING ARTの活動につなげてゆきたいと思います。

最後に手配から片づけまで多大なる準備と企画、実践と、超多忙を極めたことと思います井川先生と野坂さんに深く感謝したいと思います。

ありがとうございました。

春風と8＋9展を終えて

佐藤 千代子

春風と8＋9展の会場となるブリックホールは、いつも変わらない空間だ。しかし、そこに運ばれる日射しと風によって、しつらえは、常に同じにはならない。時に、漂い舞うように自由で、時間を見失う場ともなれば、微動だにしない空虚と、逃れられない現実を突きつける空間にもなる。

2011年、春風を目の前にして起きた東北大震災は、私に過去を問い、現実を映し、言いようのない不安を抱かせるものとなった。この震災の姿は、時間の経過と共に明らかになり、その影響は国内に留まらず、日々諸外国の対応が、混乱と困惑に揺れていた。その中「春風」の開催は、目の前に迫り、その現状は、問題終息の糸口も見えず、招待作家の渡航さえも危うくしていた。しかし、多くの困難を厭わずに、ラランジョ教授、朴南姫教授、姜パレム教授は、長崎に来てくださったのである。そして、展示された三教授の作品は、私達に強い芸術性と深いメッセージを、教えて下さるものであった。勿論これは、最終リミットまで、打開策を模索し交渉を続けられた、井川先生の熱意と想いなくして、成し遂げられたことはなかったと思う。

この混迷の春が過ぎて、いつもの暑い夏が来た。毎年、広島と長崎の8月は、他国・他県と異なる1日を過ごす。

例年、井川研究室も折り鶴パフォーマンスを行ない、被爆者の慰霊と平和を願う、活動を続けて来た。震災後、原子力神話が消えた今年、あらためて平和を考え、その答えを探す原爆の日となった。

同月開催された「平和展・8＋92011」は、新田先生・高橋先生、さらに被災地や東京からなど、多彩な参加者を迎え、多くの賛同を得る展覧会となった。

展示された作品は、形をなしながら空間にあり、空間にありながら確固たる形をなし、淡々と熱つぼかった。そしてそれらは、一瞬にして断り書きを越える、しなやかで強い、透明な波紋のように、私の心に広がった。

2011年の二つの展覧会は、平和の意味の深さを、教えてくれたと思う。戦争も震災も知らない私は、情報が齎す平和に、立ち止まる事も、迷う事もなかった。それは平和が、私にあったからだと思う。その私は今、せめて被災された方々の復興が、少しでも早まるように、今の平和を守り続けたいと思い願っている。

8＋9展によせて

岩永 晃典

今年の8＋9展は長めの体調不良で新たな制作ができないままの参加となった。それでも出品する事にしたのは、続けていく事が大切だと思っていたところにある。

何事も続けていくという事は難しいと思う。世界は、情報は、日々変化していくと言うのに、自分だけ立ち止まっているかのようだ。それでも、その変化に合わせて変わるもの、変わらないものを見定めていく事しかできない私は、続けていくという行為の中に生まれる価値観に、同じような日々に、作品に、この機会毎の意味を思う。振り返ると、私が意図するまでもなく、作品は独り歩きし、それぞれの場所で、それぞれの表情を見せてくれる。声すら聞こえてきそうなその佇まいが、出品作品の全てから溢れ出してくると、そこはもう実に賑やかなコミュニケーションに変わる。笑い声、ヒソヒソ話、わめき声、涙の音。作者の心である作品には、命が芽生えて感じられる。

今年の会場は一段と賑やかだった。年齢、内容共に大きなふり幅があり、私の心を揺らした。3月11日の未曾有の大震災を受け、本当の戦争を知らない私や、多くの人達が、「平和」という言葉により敏感になっていた時だからこそかもしれないが、関心が高まっている時こそ、分かりやすく、よりリアルな展示であった思う。

物憂げな表情の作品、原発を思い描く作品。こういった作品がアクセントとなった周りに、作者のカラーが滲み出す、暖かな作品が並び、陰影を作っていた。

平和について、アートというスタイルでどのようなパフォーマンスをできるか。私の現状での答えは、続けていくことである。震災後の自粛ムードが変換し、復興支援活動が増える中、世界の人達はどのような活動をされているのか。運送では、現地食材の販売、物資支援。音楽では、チャリティーCD制作や、コンサートの開催。ホテル、旅館では、食事の配給や、一時住まいの提供と、どれもそれぞれの仕事を生かした活動が見られる。それならば美術を通した活動は、美術でありごく自然なまでに活動することが復興アクション、そして平和への道筋ではないだろうか。

「8＋9展」の道、そのわき道に生えた草花に、虫や動物が集まり、育っていくように、「8＋9展」は続けるという普遍的なものを根底に、次々と人々の輪を広げ、つながっていく変化を持ち合わせている。

平和について考える単なる定期展ではない。この機会を通じて様々な人々の交流ができる場である。年齢、性別、国籍、あらゆる壁を越えて、過ごせるひと時がある。平和はそんな空間に存在しているように思う。

「毎回ね、楽しみにしているのよ。」と来場者から聞いた事が幾度とある。意外にも会期後が多い。ささやかにでも誰かの糧になれているのかもしれない。図々しいが、その思い込みが次の一歩の後押しを手伝ってくれる。祖父母も毎年の様に来場して、「○○さんの作品は今年も大作やったねぇ。」とか、「○○さん、元気にしとるやろか？」と、話をする。「どうやったらあんな風にできるのかしら・・・」、「ようまた、あんたも何時そんな時間があるとね。」、制作に込めた作者のエネルギーがダイレクトに届くような事もあるのだと思う瞬間である。何事も一人では成し遂げられないことが多いが、幸運にも多くの方のお力添えがあって達成できる。続けていく意義は、こういう時に心底感じるのは私だけだろうか。

8月21日深夜。今回の搬出も終わり、ふと落ち着いた頃、1本の電話があり、私の心は消えそうになった。祖父の容体が急変したという。祖父は22日の明朝を迎える事はできなかった。まるで、「8＋9展」の無事を見守っていたかの様な最期に、私達の活動を心から楽しみにして、支えてくれた祖父らしさを感じた。人は生を受け、次は死へと赴く。これは命ある限り、変える事はできないし、変わる事は無い。しかし、その時間に出会った誰かと、どういった時を過ごすのか。その生をどのように生きるのか。それは命ある限り、変える事ができると信じている。

「今日は・・・、明日は、どんな出会いがあるだろう？」最近の私はそんな思いを胸に制作をする。

気づけば私の作品のコンセプトは、いつの日からか「人になっていたのかもしれない。そんな人々に思いを寄せて、私はこれからも、私ができることを続けていくだけである。

「春風ながさきより」と「8＋9平和展」を想って

井ノ上 理恵

今年の「春風ながさきより」は、あの地震の直後に開催されました。

3月11日の地震発生以降、私が留学中の韓国でもリアルタイムで現実とは思えない光景が次々と報道され、絶望的な悲しみを感じながらも、何もできずにいる自分がまた悲しくて一人泣いてしまったこともありました。

報道が過熱するばかりの混乱した状況に心が沈んでいく中、今年の春風はどうなるのだろう？という不安をも感じていたとき、井川先生から「春風はもちろん開催します。こんな時こそ皆で力を合わせましょう。人の心は希望、それを実現するのが体です。」というメールをいただきました。その言葉は落ち込んでばかりいた私をハッとさせ、前向きに行動してみよう！と思い直させてくれました。

長崎には韓国から、またポルトガルから招待作家の先生方が見えられ、こんな状況の日本に、今このときに来てくださったことが嬉しく、人の心はすごいな、と勇気づけられました。その他の出品者の皆さんも、日本を何とか元気づけたい、という同じ願いを持って参加されていたと思います。

また、今回の春風には長崎市長から大きなお花をいただき、「長崎の文化交流と発信を頼みます」というメッセージのように感じられ、「春風ながさきより」がますます意味のある展覧会として発展していくことを予感させました。

「8＋9平和展」は灯火台モニュメントの清掃、8月9日の灯火台での折り鶴パフォーマンスとともに私にとって夏の二大行事となっていますが、今回は福島原発の事故による放射能汚染と重なり、より重要なものとなりました。

韓国、中国、日本各地（福島の作家の方も参加）、大人から子どもまで（長崎大学附属特別支援学校高等部の皆さんも参加）幅広い皆さんが一緒に集まって展示をしたこと、それ自体が、平和を表す強いメッセージであり、困難な状況でも、自分自身の表現を一生懸命に発表することがアーティストとしてできる行動だな、と改めて思いました。

「8＋9展」などの平和活動は私にとって、一年に一度、長崎で生まれた者として、また、美術を志す者として大切なことを確認する為の催しであり、今後美術を続けていく上でも中心となり、支えとなる活動です。

「春風ながさきより」と「平和展・8＋9」はアーティストたちと市民の皆さんの希望の心を実現する場として長崎に根付いてきていると感じます。

井川先生や先輩方、賛同してくださる皆さんの力によって回数を重ねるごとに意味を深めていることの継続に少しでも力になれるよう、私も努力していきたいです。

「春風ながさきより」「8＋9」展

中田寛昭

この展覧会に参加できたことは私にとって「平和」に対してもう一度考えるきっかけとなりました。「8＋9展」では「平和」というものが私たちの生活している今ここにあるのだということを感じました。この時期だからでしょうか。平和って何だろうと焦りのようなものを何となく感じていましたが、出品者の作品やギャラリートークを聞き、なぜか心が落ち着いたのを覚えています。特に灯火台建設時の話を聞いて、「平和」は今までも築き上げられてきて、静かにそこに存在していました。必ずしも何か新しい試みが築くことだけではなく、今のこの気持ちを大切に守っていくことも「平和」を築き上げることにつながると思いました。

震災直後の「春風ながさきより」では、開催自体が危ぶまれました。しかし、こういう時期にも関わらず、ラランジョ先生、朴先生、姜先生は来崎してくださいました。先生達の姿勢はこれからの私たちがどう進むべきかを教えてくださったように思います。井川先生が開催にあたり必死に各問題に対応してくださったことは、やはりアートにこそ平和への糸口があるということを一番にわかっていらっしゃったからだと思います。

私はついこの間、「学生」という身を卒業しました。井川先生のもとで学んでいたあの頃は、日々アートと触れ合っていて当然かのようでした。しかし卒業した今、この2つの展覧会に参加し、問い直したいと思うようになりました。「アート」の力や「展覧会」の意味に対して。来崎してくださった先生方は、こういう時期だからこそ駆けつけてくださったように思いますし、井川先生がかけてくださる言葉からは、今ここで動いていこうという明るい生き方を感じ勇気づけられました。アートに携わる者としての使命感を感じるのです。

私もすくなからずアートに携わる者、その意味を考え直し始めました。一過性に終わっていなかったか、単なるお披露目で自己満足していなかったか。先生達の姿から学んだことはアートをする者として積極的な行動と能動的な社会への関わりが必要であるということ。展覧会がまさにコミュニケーションの場となり、人と人とは結びつき、共有し、共に生きているということを実感します。

「8+9」と「春風ながさきより」の両展とも10年、20年と井川研究室で長年継続されている展覧会です。回を重ねるごとに、地域は盛り上がり、人々のつながりは強くなっていき、社会全体に大きな影響を与えているということをひしひしと感じます。

「アート」の力や「展覧会」の意味はアートに携わる者：アーティストにかかっているのだと思います。

井川先生はこの長崎という地を独自に解釈し、この長崎の地域性を活かして国際展へとつなげていっています。だからこそ単なる海外の作家の作品を集めた展覧会にはならず、アートを通して地域と国際を結びつけ、社会の発展・地域の活性化・文化の振興につながっていくのです。私は毎回参加しているにも関わらず決してこの展覧会が通例的なものにもマンネリなものには感じません。むしろ毎年違う表情を見せ、私たちに新しい視点や思考、また今までの再発見を与えてくれます。井川研究室の展覧会は生きています。

私自身「美術が好きだから」というところから一歩進んで、アートに携わる者として先生方が示してくださったように「アート」の力や「展覧会」の意味を発揮していきたいと思います。

その為にも、この展覧会を長年運営している井川研究室の卒業生の先輩方を見習い、専門的な知識と技術そしてなにより高い意識をもって関わっていきたいです。

「平和展・8＋9 2011」

廣岩裕香

2011年8月17日から行われた「平和展・8＋9 2011」に参加させていただきました。

展覧会初日、私は受付をしていました。しばらくしたのち、乳母車や2、3名の先生方に手を引かれた、たぶん少し障害を持った5、6歳と思われる子どもたちが数名ギャラリーを訪れてくれました。

それはこの展覧会があると知り、わざわざ出かけてきたものではなく、近くの教室からいつもの散歩コースとして、このギャラリーを訪れたものと思われました。こどもたちも楽しそうに見ていました。そして連れてこられた先生方も「ニコニコと「おもしろいね」とこどもたちに話しかけながら見てくれていました。この光景はほんの5、6分のことでしたが、作品が飾られた明るい会場と楽しそうな先生方と子どもたちの笑顔がとても印象に残っています。

その後私はテレビの取材を受けました。「なぜ平和展なのか」という問いに対し、先ほどの光景がまさに「平和である」ことではないかという答え方をしました。誰某が描いた作品だから権威があり、素晴らしいという位置づけの展覧会ではなく、様々な国や立場の人たちが、この長崎という場に集って、原爆が落とされ、多くの命が犠牲になった8月に展覧会を開催し、美術を通して会話がなされる事。なにが「平和」かと考えると、『戦争がないこと』や『すべての国から原発がなくなること』や『貧富の差がなくなること』など、様々な定義があると思いますが、私たちの作品を通して幸せや希望を感じ取ってもらえること、楽しみながら作品を鑑賞できること、ささやかな事ではありますが、それもひとつの「平和」なのではないかと考えるのです。

また、今回は福島の山本さんや東京の薄井さん、永田さんが参加してくださり、展覧会の意義をより深めてくださいました。韓国や中国からも数多くの作品が出品され、会場が華やかに感じられました。

小浜のワークショップにも今回参加させてもらいました。木の団扇に着彩するワークショップとシャボン液に絵の具を溶かし、ストローで画用紙にシャボン玉を落とすワークショップです。

あいにくの雨で、小雨に打たれながらの制作でしたが、どの子どもたちも楽しそうに作品をつくっていました。その時、姜先生のお知り合いの方がご夫婦で京都からわざわざ小浜までおいでくださり、その方は尺八の演奏を聞くことができました。

いつも思うことですが、井川先生の活動に参加した時には何か嬉しいサプライズがあります。それは前もって計画していた事ではなく「偶然」起こる事が多いようです。それは私が作品の中で考える「偶然」の中から出てくる「美しさ」に通じているようで嬉しく思います。その時、その場所、そこにいた人々が希望を持って何かに向かい活動をする事で、お互いを刺激しあい、普段とは違った「美しい感情」や「行動」が生まれてくるように思うのです。

作品も同じで、その時、その場所で、自分が絵の具を無意識に塗ることで「偶然」に美しさが出てきます。しかしそれは「偶然」を装っているだけで、無意識に美しさを出現させているとも考えられます。

今回のサプライズも「偶然」ではありましたが、真の「偶然」ではなく、そこに集った人々の「思いやり」や「楽しさ」が生み出した意識的な「偶然」だったのだと思います。

今回の展覧会では、様々な活動に参加させていただき、意義深いものでした。これもひとえに井川先生、野坂先輩をはじめとしたOBの方々、長崎大学生涯教育室の新田先生のご尽力によるものです。本当にありがとうございました。

これからも長崎の地にあって、美術の楽しさ、平和の尊さを伝えていければと思います。

春夏のRING ART、そして平和の感受性

長崎大学名誉教授　井川 惺亮

長崎での今夏の「平和展・8＋9」は、例年以上に展覧会場から『平和なるもの』が湧き上がるのを感じた。これは東日本大震災に見舞われたことにより、これまで以上に『人と人とのつながり』や『日本人が一つになる』気運の高まったことが挙げられる。

今までの平和展は、その都度、『平和』をどうアートに託して表現するか、長崎の地にあって常に問われた課題だった。地元アーティストのある会話で、「終戦の被爆直後のどさくさ紛れに、絵描き仲間が『美術展をやろう！』と立ち上がった人々がいた」と耳にし、私には忘れられない言葉となった。

その立ち上がった行為こそが、周りの人々に某かの生きることへの希望と夢を与えたに違ない。それは自ら被爆にあいながらも、倒れている友人や人たちに手を差し伸べる行為と似ているように思う。そうした思いが募っていく姿こそ、『平和』そのものの道が生まれてくる。

「春風ながさきよりⅩⅢ」は東日本大震災直後の約2週間足らずの内に、元々実施する段取りであったが、周辺からイベントなどの自粛ムードが出て来た。私たちRING ARTメンバーはじっとしておれず、アーティストとして何かをしよう！今、ここ長崎に私たちのアートがこの春風に乗り、被災の皆さんたちへ『今を乗り越える気力と希望』を少しでも届けられるようにと、美術展開催へと舵を取った。

あの原発事故発生当時は、外国人らは日本脱出の最中にあったが、本展に参加のため、ポルトガル作家ラランジョ氏（ポルト大教授）が来崎した。まさに奇跡的に来日した勇気ある大航海時代の末裔であることを思い起こし、それを長崎の地で見た思いがした。

続いて「折り鶴パフォーマンス」は、8月9日にして珍しく朝から大雨となったにもかかわらず、爆心地公園に行き交う人々に福島からの旅人が多くいて、平和への祈願や大震災への鎮魂を込め『折り鶴』を折ってもらい、300羽余りの『折り鶴』の数が灯火台モニュメントに飾られた。前述の「8＋9」では韓国から若者の参加が多く、また東京や福島からの作家も応援に駆けつけてくれ、被爆長崎で美術展開催こそ、福島原発問題ともリンクし、『平和』のテーマやモチーフがはっきりと浮かび上がった瞬間であった。

更に『平和』を助長したものは、本展に知的障害の子どもさんらも作品を私たちと一緒に並べたことだ。彼らの作品から、私たちはその造形の迫力に勇気付けられ、更に、その逞しく生きる力と美的力とが新しい瑞々しい感性となり、もう一つの彼らの『平和』へのメッセージとして響き渡ってくるのだった。

2011年平和展について

長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室
准教授　新田照夫

「平和展・8＋9 2011」は次の二点において大変意義のあるとり組みでした。

第一に、太平洋戦争の当事国であった中国と日本の現代美術作家たちが、お互いにとって意味のある8月9日という日に、戦争中は厳しく制限された表現活動の自由を、自分たちの作品によって社会に示す作品展を共同で開催したこと、第二に、今回の作品展は福島からの作家を仲間に入れての作品展でもあったということです。

こうした取り組みにした理由は次の通りでした。昨年3月11日に起きた東北・関東大震災、とりわけ福島の原子力発電所の壊滅は国難ともいうべき被害を私たちの生活に及ぼしました。

そこから私たちが学んだ教訓は、原子力発電というものが核兵器の開発を含む核エネルギー政策として国によって推進されてきたものであり、こうした政策は私たちの生活と平和を一瞬にして壊滅的な状態にまで破壊する極めて危険な政策である、ということでした。

私たちの生活を壊滅的にまで破壊する戦争政策に警鐘を鳴らす意味で、今回の平和展を市民に向けて開催したことが今回の平和展の第二の意義でした。

「平和展・８＋９　2011」DM

「春風ながさきよりⅩⅢ 2011」DM

報道関連

自身の作品を来場者に解説するラランジョ教授（右）＝長崎ブリックホール

長崎新聞　2011年3月26日朝刊

中、韓の作家招き　長崎で美術交流

30日まで「春風だより」

韓国や中国の現代美術作家らを長崎市に招待し地元作家と交流したり発信する美術展「春風ながさきだより Ⅻ」が25日、長崎市茂里町の長崎ブリックホール2階ギャラリーで始まった。

開幕式では東日本大震災に絡み、出席者から「アートは人間の落ち込みなどを癒やし、勇気をくれる」「悲しみの時こそ芸術が人々にエネルギーを与える」などと開催意義を強調する発言が相次いだ。

招待作家で韓国・昌原大学校の姜パレム教授は大震災後、友人の日本人作家が安否不明になっていると声を詰まらせ、「入院中の身だが、作品を見て日本人に元気になってほしいと思い持ってきた」と話した。

今回初めて長崎とゆかりが深いポルトガルからもフランシスコ・ラランジョ・ポルト大芸術学部長を招き、墨を使った作品5点を展示している。

30日まで。韓国、慶北大学校の朴南姫教授ら4人の招待作家や長崎大で学んだ元留学生、地元作家ら計44人の絵画など約60点を鑑賞できる。26日午後3時からは招待作家らによるギャラリートークがある。

美術展は昨年まで長崎大教育学部の井川惺亮教授の研究室が運営していたが、井川教授が昨年定年退職したため、今回は研究室のOB有志でつくるRING ART実行委が主催。（石田謙二）

長崎新聞　2011年8月20日朝刊

てきました

長崎市茂里町の長崎ブリックホールで開催中の「平和展8＋9 2011」を訪ねた。井川惺亮長崎大名誉教授の教育部時代の研究室のBOBを中心に毎年開き、平和のために作品にできることを提示している。

井川さんに聞いた。

井川さんは「どこもかなわない思ったと話す。

〈絵を描くことの根源を教えられるような気がする。彼らの身をそ落とすような造形のパワーを感じる。そこ、すべてのアーティストが自称していたものではないか

「アートはすべての人とする井川さんにとって、あらゆるアーティストの作品が共存する同展はひとつの理想形ではないか、豊かな色彩が乱舞する生徒たちの作品群は創作活動の原初的な快楽に満ちあふれている。みなぎるようなアートのパワーをはっきりと感じた」と話した。（六倉大輔）

も長崎大付属特別支援学校高等部の生徒の作品群は目を引く。色紙やカラーセロハンを自由に切り貼りして制作した鮮やかな作品群＝写真＝を見て井川さんは「どこもかなわない思ったと話す。

NCC長崎文化放送「スーパーJチャンネルながさき」2011年8月17日放送

KTNテレビ長崎「KTNスーパーニュース」2011年8月18日放送

NHK長崎放送局「ニュース845長崎」2011年8月17日放送

RING ART 2011レポート
「春風ながさきよりⅩⅢ 2011」「平和展・８＋９ 2011」

発行者　RING ART

発行所　長崎大学産学官連携戦略本部生涯教育室
長崎市文教町１－１４
TEL：095-819-2234　FAX：095-819-2236

発行日　2012年3月3日

編　集　RING ART実行委員会（中田寛昭　井ノ上理恵　佐藤千代子
岩永晃典　廣岩裕香　野坂知布　松尾美希　井川惺亮）

長崎ブリックホール ギャラリー